

オープン カレッジ

WHO（世界保健機構）が2020年3月に新型コロナウイルス感染症（新型コロナ）をパンデミック（世界的な流行）と表明して以来、4年余りの歳月が流れた。23年5月には新型コロナを「5類」に位置づけ、感染状況は全数把握から定点把握に変更された。

新型コロナの感染状況のニュースは減少したものの、経済の先行きの不透明さが増しているという指摘も多い。パンデミックと人類社会に関しては、100年ほど前にインフルエンザ、

歴史、特に経済的な側面から本稿を記載したいと考える。

スペイン風邪は1918年から感染拡大し、死者が5千万人を超えるパンデミックの一つである。100

年以上前の出来事であり、関連するデータや記載が不十分で、現在でもその実態はわかつていらない点が多い。第一次世界大戦の時期と重なったこともあつた

が、スペイン風邪が収束するにつれ社会的な関心が大きく低下したことも、記述の少なさの要因とする指摘もある。死者に関しては一部の推計では1億人を超えるという指摘もあるなど、文献による記載がさだまつてない面もある。

パンデミック

過去から学ぶ教訓

通称スペイン風邪を経験した歴史がある。今回は新型コロナと同じパンデミックであるスペイン風邪の



名古屋市立大学大学院
経済学研究科准教授
渡辺 直樹

わたなべ・なおき 証券市場、企業統治。大阪大学大学院国際公共政策研究科博士後期課程修了。博士（国際公共政策学）。1979年生まれ。

スペイン風邪は、経済的な面においても大きな影響を与えたことで知られています。スペイン風邪の感染拡大後には、世界各国はインフレーション（物価高）に悩まされた。特に、ドイツは深刻な物価高に直面し、卵の値段は4ペソ（1920年）から3兆ペソ（1923年）になつた。当時のドイツの驚異的なインフレ率を「ハイパーインフレ」の事例として、世界各国のテキストで紹介されている。新

スペイン風邪のまん延により物価高に直面した後

に、世界大恐慌へと向かっていた点は大きな不安要素となる。歴史は繰り返す

という言葉はよく引用されるが、新型コロナへの経済政策の文脈で語られるところには、この言葉は重く胸にのしかかる。私個人の意見としては、将来の見通しは悪いくことばかりではないと思われる。経済学において

は、長年の研究活動で豊富な文献資料を準備しており、財政・金融政策の手法は100年前より大きく進化している。また、スペイン風邪の調査・研究から学ぶことができる点は、100年前を生きる先人に対する大きなアドバンテージになると考えられる。

コロナ危機と今後の政策的課題